慶　應　義　塾

ISSN 1349-6468

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第19号　2013年12月31日 発行

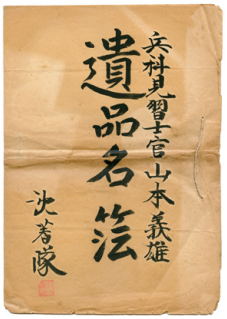
目　次

＊クレイグ先生を迎えて…… 2
＊平成 25 年度 中津市アーカイブズ講座…… 4
＊古文書講座報告…… 5
＊河北先生を偲んで…… 6
＊新収資料紹介…… 7
＊主な動き…… 8
＊戦争プロジェクト始動…… 9
＊センター諸記録（2013 年 4 月～ 2013 年 9 月）……10

①

②

③



④

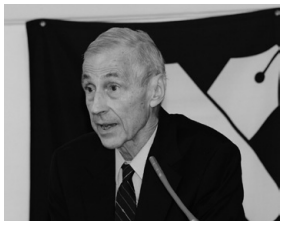
「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトの始動

福沢研究センターでは篤志家による指定寄付を受けて、8 月より「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトを始動した。このプロジェクトでは、2015 年に巡り来る「戦後 70 年」の節目を念頭に、戦時期の慶應義塾及び塾生・塾員に関連する資料・証言の収集と、その動態を示すデータベースの作成・公開を目指している。

プロジェクトには、少しずつ当時の歴史を伝える原資料も集まってきている。写真はその例で、左上より①昭和 15 年の大学予科生宅嶋徳光の日記（海軍時代の日記が『くちなしの花』の題で公刊された戦歿塾員。宅嶋徳治氏寄贈）。②海軍の特攻で戦死した塾員片山崇が婚約者に残した写真立て（髙橋よし子氏蔵）。③人間魚雷回天の特攻要員として訓練中に終戦を迎え生還した塾生の訓練時の名札（瀬川清氏蔵）。④戦歿塾生山本義雄の家族に遺品とともに届いた遺品リスト（山本孝太郎氏寄贈）。

史上特記される著名な戦歿塾生・塾員などの情報のみならず、当時の塾生・塾員の多様な動向を、多角的な資料・証言から記録することを目指している。関係諸氏のご協力をお願いしたい。（都倉）

プロジェクトホームページ　http://project.fmc.keio.ac.jp　（p. 9に関連記事）



アルバート・クレイグ氏
（ハーバード大学名誉教授）

ハーバード大学名誉教授でセンターの客員所員でもあるアルバート・クレイグ氏が、本塾訪問教授として夫人とともに4月から5月末までの2ヶ月間、日本に滞在された。著書『文明と啓蒙―初期福沢諭吉の思想』に続き、福沢の後期思想の英訳および解説を出版するための滞在であったが、その間、多くの研究者仲間の来訪があり、旧交を温めた。

帰国の日が近づく中、5月24日（金）に講演をお願いした。演題は“The National Assembly in Fukuzawa's Later Thought.”（後期福沢思想における国会論）で、講演は英語で行なわれた。会場となった三田演説館には在日の門下生や、同氏がかつて所長を務めたハーバード燕京研究所に留学経験のある義塾教員の姿も見られた。

慶應との架け橋

慶應義塾大学法学部教授
玉　井　　清

筆者は、2000年から2年間、ハーバード大学に留学し、同大学のエンチン研究所とライシャワー研究所に所属したが、そのホスト・プロフェッサーになっていただいたのがクレイグ先生であった。

エンチン研究所には、若手専任研究者を対象としたVisiting Scholar Programがあり、それに応募したのであるが、その応募に際しては、ハーバード大学の研究者による推薦状が必要であった。しかし、知り合いの研究者はおらず困っていると、同じ学部の寺崎修教授（当時）から、ハーバードには、福沢諭吉研究で有名な、しかも慶應の福沢研究センターとも縁が深いクレイグ先生がおられるので、お願いしてみたらどうかとの助言をいただいた。その助言に従い、未だお会いしたことがないにもかかわらず、クレイグ先生に推薦状をお願いしたところ、快諾するとのご返事を即座にいただいた。そのメールは、短いものではあったが、非常に好意的な内容に溢れていたことを今でも記憶している。

実は、慶應義塾大学とエンチン研究所との間には、1981年より最近まで、両大学の研究者交流のための協定が締結されていた。筆者がハーバード滞在中も、その協定を利用して総合政策学部と商学部の専任教員がエンチン研究所に来られていた。慶應からは、この協定を利用して、文系5学部から合計15名の研究者がエンチン研究所にお世話になっている。

エンチン研究所は、東アジアを主専攻にしている研究所であるが、筆者が滞在していた10年前、既に中国のパワーは圧倒的で、研究所内は中国研究、というより中国大陸からの研究者が主流を占め、それ以外の地域、日本、台湾、韓国、ベトナムからも研究者は来ていたが、どちらかと言うと少数派になっていた。こうした光景を見ていただけに、エンチン研究所が、日本の大学と、しかも慶應義塾大学と交流協定を結んでいたことは異例にみえた。

クレイグ先生は、1976年から87年までエンチン研究所の所長を長年に亘り務められていたが、その在任中に慶應との交流協定が締結されていた。その実現に、クレイグ先生の並々ならぬご尽力があったことは言うまでもないであろう。見ず知らずの小生が先生に推薦状を依頼した際の返答の中に滲み出ていた温かさは、日本に対する、その中でも慶應義塾に対する親愛の発露であったと、今では確信している。

慶應のキャンパスでお会いしたクレイグ先生は、十年前と変らぬお姿であった。物静かでスリムな体型、毎日港区のスポーツセンターに泳ぎに行かれている、とのこと。小生も見習わなくてはと思った次第である。

Albert Craig先生、燿子クレイグ先生との交流

立教大学法学部教授
松　田　宏一郎

福沢諭吉研究および幕末明治期の政治史研究で多大な功績をあげられてきたアルバート・クレイグ先生と、渋沢栄一、平塚雷鳥らの自伝の優れた英訳で知られる燿子夫人が、慶應義塾に滞在された折、お会いして福沢について意見交換をするという大変光栄な機会を与えられた。以前、A.クレイグ先生の *Civilization and Enlightenment: The Early Thought of Fukuzawa Yukichi*（邦訳は 足立康、梅津順一訳『文明と啓蒙―初期

福沢諭吉の思想』慶應義塾大学出版会，2009）の書評を *Monumenta Nipponica* および *The Japan Times* に寄稿する機会があり、もちろんそれまでもクレイグ先生の福沢研究から多くを学んできた私にとっては、直接お尋ねしたいことが多々あった。また現在、燿子夫人による、福沢の明治10年代、20年代はじめの政治論を英訳し出版する計画があるとのことで、特に私自身が以前詳細な検討をしたことのある『分権論』ほか明治10年代の著作について、その文章の表現一つ一つについて可能性ある解釈の選択肢をいくつか検討し、さらにそれを英語にした場合、意味が通じるかどうかを考える作業に、ほんのわずかながら加わることができた。『学問ノスヽメ』、『文明論之概略』、『福翁自伝』に比べて、福沢の明治10年代以降の著作については英語圏ではあまり知られていない。英訳の出版が楽しみである。

英語圏での日本研究の世界で指導的な立場にあるご夫妻は、どちらも大変気さくにフレンドリーに初対面の私に接してくださった。また福沢の政治思想についての通説に対する率直な疑念や、それとは違う読解の可能性について私が意見を述べた時も、真摯に興味をもって聞いていただき、また逆に率直な反論をいただくこともあった。日本の儒教思想の特質、徳川政治体制の構造など、A.クレイグ先生が前提とされているイメージと、現在の思想史学で共有されてる理解とはいくらか異なるところがあるが、その点について、柔軟に理解を示していただいた。他方、たとえば『帝室論』『尊王論』は、当時の政治状況への判断だけでなく、世論や国民感情の捉え方について福沢が社会科学的な考え方を深化させた面があることの両方を視野にいれて読解すべきだという点については、あらためて共有できる見方であると確認できた。福沢諭吉の政治思想については、英語圏ではまだまだ部分的な研究しかなされていない。A.クレイグ先生、燿子先生のお力で、海外における福沢研究がその思想の内部にまで光をあてるように発展することを期待したい。

クレイグ先生との昼食

首都大学東京都市教養学部准教授
河　野　有　理

残念ながら講演会には出席することはかなわなかったが、新緑のまぶしい三田のキャンパスでクレイグ先生と昼食をご一緒したのは光栄であった。想像していたより長身で、ゆっくりと丁寧な動作が印象的であった。想像していたのと異なっていたのだが、外見だけではなかった。福沢の参照した西洋書についての詳細な検討をもとに、福沢の思想におけるいわゆる「スコットランド学派」の影響について分析された Civilization and Enlightenment（『文明と啓蒙　初期福沢諭吉の思想』）の著者として、先生の御関心の焦点は、どちらかといえば「哲学より」に位置していると私は思い込んでいた。ところがお話の中で、先生の現在の御関心は、『分権論』から『国会論』にかけての福沢の論説の政治的意図に向けられていた（ご講演の内容とも、あるいは関係があったのではなかろうか）。なかでもとりわけ「封建」という言葉の用法について先生はご興味を示された。

私の考えでは、福沢は「封建」という言葉で、もっぱら「封建門閥」という言葉に代表されるような職業選択の自由なき江戸の身分制を表現しようとした。しかも、福沢における「封建」の語のそうした用法は、極めて意識的かつ戦略的になされたものだった。というのも、同時代の「封建」という語は、単に身分制のみにはとどまらないふくらみをもったなかなかやっかいな言葉だったからである。そのことを理解しなければ例えば次のような福沢評の理解は困難だろう。

> 彼（福沢）は社交上において階級儀式の類を排斥すれども、旧時の遺物たる封建制には甚だしき反対をなさざりき。むしろ中央集権の説に隠然反対して早くも地方自治の利を信認せり（陸羯南『近時政論考』）

「旧時の遺物たる封建制には甚だしき反対をなさざりき」とは、一見すると、福沢への評価としては異例なようである。だが、陸がここでは「封建」を、「中央集権の説」に対する「地方自治の利」を「信認」する立場として用いている点を理解することが大切である。こうした「封建」の用法は同時代においてごく普通のことであった。そうしてみれば、福沢の『分権論』は同時代的な文脈では、「封建論」でもあったのである。

福沢のみを読んでいては、福沢を理解することはできない。先生のスコットランド学派研究の中にも、勝手に共通する方法的意識を読み込んだ私は、最後にクレイグ先生に一つ質問した。福沢以外の明治初期の思想家で誰を研究したいと考えているか、と。答えは加藤弘之であった。クレイグ先生の加藤研究も今から楽しみである。

平成25年度　中津市アーカイブズ講座

本年度の中津市との提携によるアーカイブズ講座は、高校生と大学１、２年生を主な対象とした「初級者の部」が８月７日（水）から９日（金）までの２泊３日、別府大学の学生等と合流した「中級者の部」が、８月８日（木）から12日（月）までの４泊５日間の日程で行われた。アーカイブズ講座の開催は、今年で５年目になる。

初級者の部では、大阪と中津で、福沢諭吉関係の史跡見学も行った。詳しい内容は以下の通りである。なお宿泊は、初級者の部が旅館日吉、中級者の部が中津市営の研修施設八面山荘であった。

参加者は、初級者の部が高校生９名（慶應義塾高１、志木高２、女子高４、SFC 中高等部２）、学部生３名（文学部１、経済学部１、法学部１）、中級者の部は別府大学より21名、九州大学大学院より１名が参加し、福沢研究センターからは調査員４名が TA として参加した。

なお、引率人員は以下の通り。

大塚彰（志木高）、末木孝典（慶應義塾高）、都倉武之（福沢研究センター）、西沢直子（福沢研究センター）、馬場国博（SFC）、馬場秀行（女子高）、見滝静香（SFC）、結城大佑（女子高）

＜初級者の部＞

８月７日　8:00　東京駅集合　のぞみ207号
10:33　新大阪駅着

【福沢諭吉関係史跡の見学①】

適塾・除痘館記念資料室・大阪慶應倶楽部・大阪慶應義塾跡・福沢諭吉生誕地記念碑・慶應大阪シティキャンパス

14:45　新大阪駅発 のぞみ31号、ソニック39号
17:42　中津駅着
21:00　勉強会
1）福沢諭吉と中津についての基礎知識
2）古文書を読むための基礎知識（暦の読み方、干支十二支、江戸時代の貨幣制度、くずし字などの学習）

８月８日　9:00　福沢記念館集合

【福沢諭吉関係史跡の見学②】

福沢諭吉旧邸および福沢記念館・寺町及び明蓮寺・村上医家資料館

13:30　開講式　於中津小幡記念図書館
中津市長・中津市教育長挨拶・参加教員紹介
14:00　講義①「福沢諭吉と中津」西沢直子
15:15　講義②「襖の下貼り文書」
尾立和則氏（元京都造形芸術大学教授）
21:00　勉強会
古文書入門（くずし字で書かれた食材の一覧や、現存する最も古い福沢の書簡を読んでみる）

８月９日　9:00　実習
１班：１時限 西沢担当　２時限 尾立先生担当
２班：１時限 尾立先生担当　２時限 西沢担当
実習は、２班に分かれ、解読実習（西沢担当）と襖の木枠や表紙はがし（尾立先生担当）を行った。
13:00

【福沢諭吉関係史跡の見学③】

中津城内独立自尊の碑・本耶馬渓・青の洞門・羅漢寺
18:00　北九州空港発 羽田空港到着後解散

＜中級者の部＞

８月８日　初級者の部と共通
８月９日　9:00　講義③「史料の写真撮影」
針谷武志教授（別府大学）
10:45　福沢記念館見学　都倉武之
13:30～16:45　整理・目録作成実習
８月10日　9:00～16:45　整理・目録作成実習
18:30　学生親睦会
於八面山荘バーベキューハウス
８月11日　9:00～16:45　整理・目録作成実習
８月12日　9:00～12:15　整理・目録作成実習
12:15～12:20　閉講式 中津市教育長挨拶

本年度解体した襖は、医家であった大江家の襖で、また目録作成は昨年に引き続き小田部家文書を扱った。大江家は明治維新後も中津の名望家で、下張文書に含まれていた帳簿らしき断片類は、今後同定作業がどの程度できるかにもよるが、地方企業に関する新しい情報も得られそうである。また本年度目録採取が進んだ分は、切米の支給催促など、禄米に関するものが多かった。おそらく配給係が輪番制で、小田部武右衛門が務めた時期もあったのであろう。

中津古文書講座を終えて

慶應義塾女子高等学校教諭　馬　場　秀　行

体育館ほども広い講堂の一隅で尾立和則先生は、古いふすまを一枚取り出して、金槌で木枠をたたき壊し始める。大きな講堂全体に轟音が響きわたる。四角形に並べられた机に座って西沢先生に古文書の読み方の初歩を学んでいる生徒たちは、コピーされた解読用のテキストと漢字かな交じり文の穴埋めクイズ形式のプリントをじっとにらんでいる。尾立先生は、木枠を外すと平たい鉄の包丁のような道具を使って、ふすまの外張りから下張りへと剝がしにかかる。数枚が重なっている。一枚一枚がうまく剝がれることもあれば数枚が固まって剝がれることもある。文字が見えると尾立先生はひときわ大きな声を上げて、「これは明治中期のものやなあ」と、取り囲んだ生徒たちに視線を投げかける。生徒たちは、目の前に起こっていることがなかなか飲み込めず、うまく剝がれた下張りの紙から文章らしきものが全体として見えてくると、驚嘆の声を上げ、「うわあ、すごい」とため息をつく。

これが帰京後、生徒たちが異口同音に「楽しかった」と感嘆の声を上げた襖から古文書を取り出す作業である。参加した女子高１年生の一人Ｗ君は感想に次のように書いてくれた。

「大阪中津の研修旅行で一番心に残っていることは、なんといっても襖を剥がす作業の講座です。明治のころの手紙が出てきたときは本当に感動しました。１枚の襖が100年近くの歴史を繋いでいると思うと本当に感激です！古文書を読むことに対しては始め不安があったのですが、講座で食べ物の名前を解読してみて、わかりやすかったし興味がわいてきました。まだ学校で古文書などはやってないですが、これからもっと勉強したいな、と思いました。重要な古文書を手で触れられたのもうれしかったです。いろんなことをたくさん学べる良い機会になりました。ぜひ来年も参加したいです。」

古文書を解読する初歩をひとつのグループが習い、他方のグループは、実際に襖の下張りから古文書が取り出されるところを目撃する。写真に撮り、清書し、文書として整理される、と習う。これほど、子供達の感性と知性のすべてに訴える学習は他にない。

今日慶應義塾が生徒たちにどのような自己発見とより深い学問へ誘うプログラムを与えられるのか。過去及び最新の教育遺産を伝えるだけではなく、学問というものがどのように開けて来るのかを教えてあげられるのはどのような活動を通じてであろうか。後期中等教育段階においてそれは、その端緒となる機会や活動に生徒たちを向かわせてあげられるかどうかにかかっている。子供達が飛びついてくるほど面白いことを、私達教員は用意しておくよう常に心がけていなければならない。教室の内外でそのはずである。

大学受験という足かせが無くても、推薦のための公平な基準に基づく学習成果を検証することが求められる一貫校では、諸学の入門的な活動をすることは出来る。しかし、それは習慣化された小規模なものにならざるを得ない。定期テストやアチーブメントテストで推薦のための結果を出す勉強を求められるからである。

そうした条件の中で、中津古文書講座が果たす意義はまことに大きい。教室の勉強では決して得られることのできない自己発見と自己啓発への「機会」を与えられるからである。与えられたその機会に生徒達がどのような契機で自分の中に今までに自覚していなかった好奇心の発条を発見できるかはもちろん予見できないが、教室で黒板とテキストと教師の言葉の日常に、感動を失い、鈍感にされてしまった生徒達に、この講座は、真理へと向かってゆく覚醒した精神をかき立てることができるインパクトを持っている。

生徒たちどうしで、受けた印象や意見の交換をする機会を作り、参加者全員の感想文を記録として残すこともこのプロジェクトの成熟に意義あることだろう。

江戸末期に作られた日吉旅館に泊まり、文久期から営業している銭湯「汐湯」（うしおゆ）に入った体験もきっと生徒のそうした文章の中に出てくるに違いない。

この講座に出発する夏前の準備段階から、用意周到な心配りをされて、宿での女子生徒のお風呂の都合のことにまで気を遣って下さった西沢直子先生にはあらためて、そのお骨折りには感謝の言葉もありません。また都倉武之先生には、その後記録的な猛暑となっていったサウナ風呂状態の大坂と中津の昼間を、電車の乗り継ぎを含め分刻みで予定された福沢諭吉ゆかりの見学地を馳せめぐり、懇切に説明をしていただいたご苦労も忘れられません。厚くお礼申し上げます。

河北展生先生を偲ぶ

大妻女子大学短期大学部教授
福沢研究センター客員所員　高　木　不　二

2013年2月23日文学部名誉教授で福沢研究センターの所長も勤められた河北展生先生は、ご自宅でご家族に見守られながら、静かに息を引き取られた。大正10年のお生まれなので、享年92ということになる。以下、長年にわたって教えを受けたものとして、いくつか思い出すことどもを記して、先生を偲ぶよすがとさせていただきたい。

先生はもともと松平春嶽の政治論などを中心とした幕末政治史を研究されていたが、慶應義塾100年史の執筆編集にかかわるなかで、慶應義塾の歴史に強い関心をもつようになられたようである。そうした先生にとって『慶應義塾125年』（写真集）の編集と記念展覧会の開催は、塾での生活の締めくくりとなる大きな意味をもつものであった。当時100年史の編纂拠点となった塾史編纂所は福沢研究センターに発展的に改組されつつある時期であったが、先生は毎日のように塾史編纂所のちには福沢研究センターに通われ、その編集作業に没頭された。そのお姿は仕事をするという感じとは無縁で、楽しそうにさえ見受けられた。100年史編纂のときのご苦労を知っておられたので、現在の態勢では大きな編纂物を作るのは無理と判断され、写真集の発刊を提案されたのも先生であったと記憶する。写真集の編集にあたっては福沢諭吉や塾史研究の第一人者であった富田正文氏のご意見なども伺いながら、当時日産ビルにあった塾史編纂所で写真撮影の準備をされていた。また『慶應義塾125年』の末尾に掲載された「慶應義塾125年の歩み」と題した解説は先生がみずから筆を執られたもので、写真の選定にあわせて先生が何度も何度も書き直され、そのたびにコピー機のまえで新原稿をみずからコピーされていたお姿が今でも忘れられない。

先生はまた125年の記念事業に関連して福沢研究センターの発足にも大きくかかわっておられた。先生は150年史の編纂態勢を作り上げることを考えておられ、もう一方で塾史編纂所の将来も心配されていた。あるとき研究室の雑談のなかで、これからの福沢研究のありかたをめぐって河北先生が同じ文学部の中井信彦先生に相談をもちかけておられたのを記憶している。当時先生は「『福翁自伝』を読む会」という、大学教員のみならず広く諸学校教員や職員、さらにはOBをふくめた福沢研究に関心をもつ有志の研究会を主催されていた。月に一回自発的に10人前後のメンバーが集まり、『福翁自伝』を読みすすめながら、詳しい注をつくっていこうという実証的な会であった。私も途中から参加させていただいたが、慶應らしいフレンドリーな集まりで、福沢研究に関心がある方がたがこれほど多く慶應義塾のまわりにおられるということは大きな驚きであった。こうした研究活動の蓄積がやがて先生晩年の著作『「福翁自伝」の研究』（佐志伝氏との共著）に結実するのだが、しかしそうした福沢研究も慶應義塾全体との関係を意識したとき、ある種の壁にぶつかっていることを先生は当時感じておられたのだろう。中井先生との話し合いは、そうした今後の福沢研究の方向性を模索するものであったとおもわれる。お二人が到達した結論は、研究対象を福沢諭吉個人にとらわれることなく、その門下生・卒業生にまで広げて考えていこうというものであった。

最初に着手したのは、多くの学部の先生方に声をかけて共同研究を進めることであった。テーマは「福沢門下生と日本の近代化」というようなものであったと記憶するが、慶應義塾から三年間福沢基金をいただいて精力的な地方調査をおこなった。メンバーには文学部の河北・中井両先生はもとより、代表となられた経済学部の島崎隆夫先生はじめ、法学部の高鳥正夫先生、商学部の石坂巖先生など錚々たる方がたが名を連ねた。わたしも会計事務要員としてその末席をけがしたが、慶應義塾の初期に入学生が多い和歌山や熊本、長岡などの現地調査を手分けしておこなっていった。

そのなかで125年記念事業の一環として塾史編纂所を発展的に改組し、150年史を編纂する拠点として慶應義塾福沢研究センターの設立が図られていく。石坂巖先生を中心に先の共同研究メンバーが挙ってこれを後押しするかたちで、最終的には慶應義塾のみならず日本近代史の研究拠点としてその実現をみたことはいうまでもない。

最後になりましたが、河北先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

平成25年3月から平成25年8月までの間に、福沢研究センターに収蔵された主な資料を紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきながら、すべての資料をご紹介することができず申し訳ありません。　（物故者敬称略）

福沢諭吉差出書簡

今回は多くの福沢諭吉差出書簡が新たに収蔵された。特に『福沢諭吉書簡集』（岩波書店 2001～2003年）未収録の新資料として、これまで名宛人として知られていなかった根岸武香に宛てた書簡を収蔵することができた。

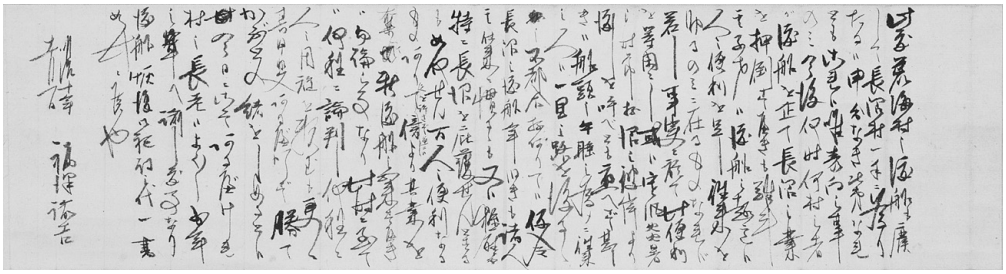
■ 根岸武香宛書簡　明治16（1883）年12月15日付　1通　【購入】

日本鉄道会社の本庄までの第一期工事が終わり、鉄道の必要を力説して会社創設に関わった福沢のもとに、チケットが送られてきた。福沢は浜野定四郎、岡本貞烋、高島小金治らを伴い、12月9日日帰りで熊谷を訪れた。熊谷直実の寺へ参り、熊谷での歓迎午餐会で演説した。演説内容は、翌年2月15日に発行された『交詢雑誌』に掲載された。根岸武香はこれまでに名宛人としてだけではなく、書簡には登場したことがない人物で、『慶應義塾入社帳』にも記載がない。天保10（1839）年埼玉県熊谷市（旧大里郡冑山村）に生まれ、剣術を千葉周作、和漢学を寺門静軒、安藤野雁に学んだ。明治6年には熊谷県学区取締を務め、12年県会開設とともに副議長を務め、翌年議長となる。27年には貴族院多額納税議員になった。鉄道事業にも尽力し、明治36年の『人事興信録』では、武州鉄道株式会社監査役・合資会社興業貯蓄銀行監査役となっている。根岸家は、慶長年間以来の旧家で、大地主であった。

■ 長沼村民宛書簡　明治10（1877）年11月1日付　1幅　【購入】

千葉県埴生郡長沼村（現成田市）にあった300ヘクタール程の「長沼」の漁業・採藻権、渡船営業権を巡って起こった争いに関するもの。江戸時代には長沼村のみの入会地であったが、明治以降上流の村々からの要望があり、周辺村落15カ村を含んだ入会地に変更されることになった。また渡船の営業権の独占も崩されることになり、「長沼」によって生計を立てていた長沼村は困窮した。県庁に嘆願しても聞き入れてもらえず、手立てを失っていたところ、たまたま村民の1人が『学問のすすめ』を読んだのをきっかけとして、明治7年12月村民の小川武平らが助力を求めて、福沢のもとを訪ねてきた。状況を知った福沢は、県庁との交渉などに援助を惜しまず、明治9年「長沼」の5年間の有償貸与を勝ちとった。

この書簡は、その翌年に対岸にある荒海村が渡船の営業を認められなくなり、長沼村が独占を回復したときのもの。「渡船恢復御祝詞」を認めるとともに、慢心して船頭の午睡のために便を出さないといった、人々の便利を考えない行動をとることがないよう「勝てかぶとの緒をしめるとハ、今日ニこそあるべけれ」と自重をも求めたもの。『福沢諭吉書簡集』第2巻27～28頁。



■ 阿部泰蔵宛書簡　年未詳2月27日付・明治15年9月28日付・16年2月7日付・同年2月12日付・同年2月14日付・同年2月27日付・同年3月6日付・21年1月25日付・23年？12月18日付・25年3月19日付・26年11月30日・20年6月16日付（貼込順）　12通1巻　【購入】

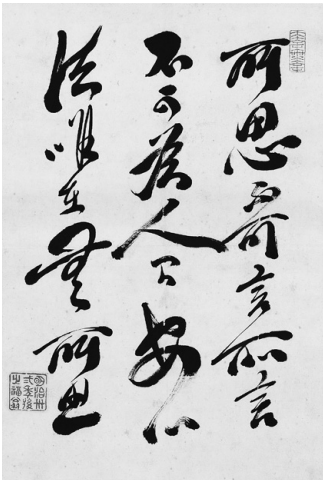
この巻子に貼り込まれている書簡は、いずれも内容についてはすでに知られていたもので、すべて『福沢諭吉書簡集』に収録されている。ただ、編集時にはどの書簡も所蔵者がわからず、原本との校訂ができなかったため、やむをえず『福沢諭吉全集』（岩波書店、再版1971～1973）から再録した。この度の校訂結果は、『近代日本研究』第30号（2014年3月発行予定）に掲載の予定である。明治16年2月と3月に頻繁に出されている書簡は、福沢諭吉の長女里の中村貞吉への縁組に関するもので、阿部泰蔵が仲介を務めた。2月7日付の最初の書簡では、両家の顔合わせ会について、吉日を選んで先方が挨拶に来るのも、当方から出向くのも「随分繁忙」なので、日本橋辺りの茶屋で略式にすませたいと述べ、阿部に同席を依頼し、また段取りについて自分の案を述べている。しかし福沢といえども、初めて子どもを結婚させることに緊張したのか、体調を崩して2度も延期した。3月6日付の書簡で、ようやく縁談が整い、阿部に鮮魚一尾が送られている。

福沢大四郎家関係資料

【Emi Fukuzawa & Kiyoshi Murata 氏寄贈】

福沢諭吉の曾孫で、四男大四郎の孫にあたられるエミ氏がお亡くなりになり、夫君である Kiyoshi Murata 氏から、大四郎、その長男進太郎（慶應義塾大学法学部教授）、その子息幸雄、エミが暮らした鎌倉山の住まいに残されていた関係資料24点が寄贈された。主なものは以下の通りである。

1）福沢諭吉書幅
「所思不可言　所言不可為　人間安心法　唯在無所思」 1幅
2）慶應義塾出版社版木ついたて　1台
3）福沢進太郎アルバム　1冊
4）福沢大四郎写真　1枚
5）福沢大四郎と妻まつ写真　1枚　他　計24点



1）

塾員関係資料

■ 本山彦一宛吉川泰二郎書簡　年月未詳27日付　【購入】

雑事のため約束していた訪問ができなくなったことを伝えるもの。本山彦一は熊本の出身で、藩校に学び、明治4年上京後は箕作秋坪の元で学んだ。7年ごろから福沢に親炙し、慶應義塾出版社に止宿。12年に兵庫県に勤務したのち、箕浦勝人の後任として大阪新報社に入り、以後ジャーナリストの道を歩む。昭和5（1930）年貴族院議員に勅選される。差出人の吉川泰二郎は、奈良の神官の家に生まれ、明治3年に慶應義塾に入学。東奥義塾教員や愛知県英語学校長を務め、11年郵便汽船三菱会社に入り活躍、日本郵船会社の設立と同時に移籍する。この書簡は封筒の宛先から、本山が時事新報社に勤務している明治16年から19年の間と思われる。

■ 本山彦一宛箕浦勝人・鹿島秀麿書簡　明治32年11月30日付　【購入】

箕浦勝人は臼杵の出身で明治7年に慶應義塾を卒業後、ジャーナリストや政治家として活躍、衆議院副議長も務めた。鹿島秀麿は徳島の出身で、明治7年に慶應義塾に入学、卒業後は淡路島の洲本中学などで校長を務めた。また民権家としても活動し、衆議院議員にも当選している。このとき本山は大阪毎日新聞社相談役。

2）

主な動き

■ センター講演会

9月28日（土）に、日本英学史学会との共催で、5月のクレイグ氏と同じく三田演説館において講演会を開催、マギル大学教授太田雄三氏をお招きして「英学の終焉と学生の英語力の低下」と題する講演をお願いした。なお、講演録は『近代日本研究』第30巻（2014年2月刊行予定）に掲載される。

■ ワークショップの開催

9月6日（金）、ワークショップを開催した。内容は大妻女子大学ほかで非常勤講師を務め、センター調査員でもある坂井博美君の著書、『「愛の争闘」のジェンダー力学―岩野清と泡鳴の同棲・訴訟・思想』についての書評会で、コメンテーターとして尚絅大学准教授宇野文重氏、一橋大学大学院社会学研究科特別研究員簑輪明子氏をお招きした。

■ センター公開講座

日吉キャンパスで開講している「近代日本と福沢諭吉Ⅰ」では、今年度もゲストスピーカーをお招きして公開講座を開催、慶應義塾大学出版会代表取締役会長の坂上弘氏（6月17日）、清家塾長（7月1日）に特別講義をお願いした。

■ 中津アーカイブズ講座

今年で5年目となる中津市アーカイブズ講座を8月に開催した。7日（水）～9日（木）は「初級者の部」で、慶應義塾から高校生9名、学部生3名が参加、8日（木）～12日（月）は「中級者の部」で、別府大学21名、九州大学大学院1名、福沢研究センター調査員4名が参加した。「初級者の部」は未来先導基金による公募プログラムであり、今年が2回めの実施であった。詳細は p.4－5 を参照されたい。

「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクト始動

本年８月、「慶應義塾と戦争」をテーマとするプロジェクトが始動した。このプロジェクトは戦後70年を迎える2015年を目処に、① オリジナル資料の収集、② 聞き取りや回想記の収集、③ 基礎的なデータの整備、④ 展覧会やインターネットでの成果公開を目指している。

先の大戦では義塾関係者から2200人を超す戦歿者を出し、全国最大の空襲被害をうけた大学とされ、塾史編纂上、極めて重要な時代である。またこの時代の義塾を見つめ直すことは、日本が戦争といかに向き合ったのかを考える一つの切り口としても意義あることであろう。

この分野では、経済学部白井厚ゼミによる調査が重要な研究成果となっているが、大学としての徹底調査は十分なされておらず、他大学の遅れを取っているのが実情である。今後義塾においても多様な議論が、事実に即して健全に、活発になされていくためには、十分に基礎資料を収集・検討する必要がある。そのための最後の機会が今ではないか。その問題意識に基づくのが、このプロジェクトである。現時点の活動の概要は以下の通りである。

■ 聞き取り調査

陸海軍で戦争を経験したOB（中退者を含む）、戦歿した塾生・塾員の遺族・関係者を中心に聞き取り調査を行っている。現時点では東京近郊のほか長野・京都・福岡なども合わせて計23人に体験談をうかがった。目標は100人である。現在、海軍関係証言にやや偏しているが、軍関係のみならず、キャンパス周辺の空襲や、疎開・勤労動員など多様な内容、日系２世や台湾・朝鮮籍など多様な属性の体験を収集したいと考えている。

■ 資料調査

回天記念館、大刀洗平和記念館、水交会、佃島住吉神社、わだつみのこえ記念館にて資料調査を行った。

■ 主なオリジナル資料寄贈

宅嶋徳光関係資料（弟・宅嶋徳治氏寄贈）

宅嶋徳光は昭和13年に法学部政治学科入学、18年９月繰上卒業。海軍第13期飛行専修予備学生。昭和20年４月、松島沖での訓練中に殉職。資料には日記、家族にあてた手紙、学生時代に使用した英英辞典、アルバムなどが含まれる。日記は『くちなしの花』の題で公刊され、広く知られている。

笹山基関係資料（弟・笹山堅氏寄贈）

笹山基は昭和17年に大学予科に入学、20年１月応召、陸軍入営。終戦後ソ連に抑留され、10月イリチョフカにて死去。出征の際の記念写真、家族宛の手紙、死亡通知書などが含まれる。

山本義雄関係資料（弟・山本孝太郎氏寄贈）

山本義雄は昭和15年経済学部予科入学、18年学部１年時に学徒出陣で陸軍入営。20年８月10日、本土決戦に向けた作業中に病死した。資料には学生服、陸軍軍服、家族宛の手紙、アルバムなどが含まれている。

■ 基礎データの整備

学籍簿及び戦友会関係名簿の調査を進めている。学徒出陣期を中心に、在学者一人一人の動向をできるだけ詳細に追えるデータベースの作成を計画している。

■ 展覧会開催

11月末から12月にかけて、三田メディアセンター内展示室（第１会場）、南別館アート・スペース（第２会場）にて、「慶應義塾の昭和十八年」と題する展覧会を開催した。第１会場にはおよそ4000人、第２会場にはおよそ800人の来場があった。今後２年間で２回の展示を予定している。

福沢研究センター諸記録（2013年４月～2013年９月）

■ 諸会議
＊平成25年度第１回執行委員会（５月22日）
＊平成25年度第２回執行委員会（６月19日）
＊平成25年度第１回福沢研究センター会議（５月30日）
＊平成25年度第１回運営委員会（６月27日）
＊小泉基金運営委員会（７月17日）
＊『近代日本研究』第30巻第２回編集委員会（８月22日）
＊『近代日本研究』第30巻第３回編集委員会（９月26日）

■ 人事
〈所　　員〉 退任　斉藤暁子（女子高等学校）　～３月31日
　　新任　結城大佑（女子高等学校）　４月１日～
〈客員所員〉 新任　田中康雄（研究嘱託から客員へ）４月１日～
〈事 務 局〉 新任　石崎亜美（非常勤嘱託）　４月１日～
　　退職　高嶋朱里（事務嘱託）　～７月21日

■ 主な来往
＊中津旧邸保存会事務局長松下太氏、中津教育委員会学芸員吉川和彦氏来訪（４月17～18日）
＊石垣貴千代氏、塾員玉川博己氏、戦没塾員資料の件で来訪（５月14日）
＊金沢大学名誉教授丸山珪一氏、資料閲覧のため来訪（５月15日）
＊ NHK 報道局安部康之氏ほか１名来訪（５月21日）
＊法政大学笹川ゼミ来訪、施設の見学（５月24日）
＊常盤大学名誉教授坂田仁氏来訪（６月４日）
＊中国からの留学生劉利陽氏来訪（７月12日）
＊上原家調査に関する NHK の取材対応（７月22日、31日）
＊ ICU 客員所員飛田良文氏、資料閲覧のため来訪（８月20、29日、９月２、３日）
＊金明洙氏、羅蕙錫（ナ・ヘソク）学会会員が来訪、資料調査および施設を見学（８月22日）
＊名誉教授桑野博氏ほか、資料閲覧のため来訪（９月４日）
＊韓国テレビ局の取材対応（９月19日）
＊塾員高梨義郎氏来訪、合わせて NHK の取材対応（９月20日）

■ 出張・見学
＊都倉准教授、メディアコムの葉山でのオリエン合宿に参加（４月５～７日）
＊西沢教授、北鎌倉の福沢大四郎氏ご子孫宅を訪問（５月15日）
＊岩谷所長、大阪シティキャンパス開所式に出席（５月20日）
＊西沢、小倉庭園博物館を訪問、その後中津旧邸保存会評議会（５月21日）
＊都倉、福沢大四郎関連資料の引き取り（５月21日）
＊清野主務、全国大学史資料協議会東日本部会総会（中央大学）に出席（５月29日）
＊都倉、福岡在住の宅嶋徳治氏、井上徳世氏宅を訪問（６月12日）
＊都倉、横浜初等部で「福沢先生ミュージアム」展示作業（６月20日）
＊都倉、馬喰町の三上旗店を訪問（６月27日）
＊都倉、横山調査員、亀岡敦子氏、上原家調査のため安曇野市（７月６日～７日）
＊都倉、聞き取り調査のため塾員佐々木栄一郎氏宅を訪問（７月12日）
＊西沢、中津市役所にて古文書講座の打合せ（７月26日）
＊西沢、皇太子行啓に伴い、中津の福沢旧邸、記念館を案内（７月27日）
＊西沢、川越在住の岩﨑昭九郎氏を訪問（７月31日）
＊都倉、横山、資料調査及び NHK の取材対応のため上原家を訪問（松本市、安曇野市）（８月１～２日）
＊都倉、横山ほか、水交会にて調査（８月28日）
＊都倉ほか、聞き取り調査のため久喜市在住の髙橋よし子氏を訪問（８月30日）
＊都倉ほか、佃島住吉神社にて資料調査（９月７日）
＊都倉ほか、聞き取り調査のため塾員土井庄一郎氏を訪問（９月７日）
＊都倉ほか、わだつみのこえ記念館にて資料調査（９月９日）
＊都倉、横山、周防市の回天記念館にて資料調査（９月12日）
＊都倉、横山、聞き取り調査のため北九州市の古賀三千人氏、長谷川博氏宅を訪問（９月13日）
＊都倉、横山、福岡県の大刀洗平和記念館にて資料調査（９月14日）
＊都倉、横山、聞き取り調査のため福岡市の宅嶋徳治氏、井上徳世氏宅を訪問（９月15日）
＊都倉、メディアコムの湯河原合宿に参加（９月28日）

■ 講師派遣
＊西沢、信濃町新任職員オリエンで講義：「福沢諭吉と北里柴三郎－慶應義塾の医学」（４月１日）
＊都倉、信濃町研修医・専修医の新任者オリエンで講義：「慶應義塾と福沢諭吉、北里柴三郎」（４月１日）
＊西沢、中等部新入生向け特別授業で講義：「一身独立とはなにか？」（４月10日）
＊都倉、SDM の合宿で講義：「福沢諭吉の服装から日本の近代を考える」（４月14日）
＊都倉、福沢諭吉記念文明塾で講義：「福沢諭吉の思想・理想・服装」（５月11日）
＊都倉、SFC 中等部で講義：「慶應義塾で学ぶということ」（５月16日）
＊都倉、寮和会主催日吉寄宿舎新入生歓迎会で講演：「慶應義塾史上の日吉寄宿舎」（５月18日）
＊西沢、西川ゼミ OB 会で講演：「福沢諭吉と女性」（６月１日）
＊都倉、SFC「慶應義塾入門」で講義：「濃尾地震、三陸大津波と福沢先生」（６月７日）
＊西沢、上智大学比較文化研究所 "Women and Networks in Nineteenth Century Japan" で発表：「福沢家女性たちのネットワーク」（６月８日）
＊都倉、所沢三田会で講演：「福沢諭吉と「慶應ボーイ」」（６月９日）
＊都倉、相模原三田会で講演：「素顔の福沢諭吉」（６月15日）
＊西沢、福沢諭吉記念文明塾で講義：「文明と品格－福沢諭吉の男女論」（６月15日）
＊岩谷、福沢諭吉記念文明塾で講義：「文明の作法－智徳と情理の交錯点」（６月22日）
＊都倉、町田三田会で講演：「最後の早慶戦70年」（６月23日）
＊西沢、すみだ女性センターすずかけ講座で講義：「福沢諭吉と女性」（７月４日）
＊西沢、善行雑学大学で講演：「福沢諭吉の家族論」（８月18日）
＊西沢、学生部部門別研修で講義：「慶應義塾における制度的変遷（大学令まで）」（９月３日）
＊都倉、学生部部門別研修で講義：「旧制大学認可後の慶應義塾」（９月３日）
＊西沢、韓国女性史学会月例会（淑明女子大学）で発表：「女性たちのネットワーク形成と階層化－福沢家を事例に」（９月13日）
＊都倉、港区立生涯学習センターで講義：「福沢諭吉のイメージと実像」（９月25日）

■ 訃報
＊名誉教授中村勝己君（センター顧問）逝去（７月26日）

■ その他
＊平成25年度福沢研究センター設置講座ガイダンス　三田（４月１日）、日吉（４月５日）
＊服部家から寄贈資料（ダンボール281箱）を搬入（６月11日）
＊河北先生を偲ぶ会（６月21日）
＊未来先導基金による中津古文書講座（８月７～９日）・アーカイブズ講座（８月８～12日）
＊図書・資料の燻蒸（８月11～14日）
＊服部家からの寄贈資料をリスト化（９月２日～10月２日）

慶應義塾福沢研究センター通信　第19号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日　2013年12月31日　（年２回刊）
編　集
発　行　慶應義塾福沢研究センター
〒108-8345　東京都港区三田２－15－45
電　話　03－5427－1603
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印　刷　（有）梅沢印刷所